

自由図書の一部 佳作

細羽美晴さん 経済学部経営経営学科2年

『作家の履歴書：21人の人気作家が語るプロになるための方法』
阿川佐和子 [ほか] 著 / KADOKAWA

「作家だって人だ。」

人生で初めて履歴書を書いたのはいつだろうか。私は高校生のときに郵便局の年末バイトのためにコンビニで買った履歴書を悪戦苦闘しながら埋めた思い出がある。そして多分人生で一番履歴書を書くのはこの大学時代になるのだろう。そんな身近になってしまった履歴書とは程遠い存在の職業の人も多数いる。その人達の履歴書は一体何を書くのだろうか。

今回取り上げる本はそんな程遠い存在の職業の1つに挙げられるであろう作家が履歴書を書くというテーマで作られている。しかし、サブタイトルでは「21人の人気作家が語るプロになるための方法」と書いてあるが、そんな夢物語のような虫のいい話を書いているわけではない。むしろ1社会人がどうやって仕事と向き合っているかという現実味が溢れている自分の周りの誰かの話を聞いているようである。

それぞれがなぜ作家を目指したのかというベタな質問からどのくらいのペースで小説を書くのか、アイデアは何処で生まれるのかなど作家にとってはまさに企業秘密とも思える質問までしっかりと答えてくれる。その中で垣間見えるのが彼らの人間性だ。いくら筆が乗っても毎日決めた量しか書かない人やお小遣い制のため自分の収入を全く知らない人などその人の人となりを知ることができるのは非常に面白い。そして、それらを読みながら改めて感じるのは作家といえどもやはり彼らも人なのだということだ。彼らは生活するために文章を書いているという部分もあるし、仕事として小説と向き合っているのだということを感じてひしひしとを感じる。多くの人が何かを創造することを仕事としている人に対して「好きだからやってるんでしょ」とか「才能があるからできたんだよ」というような対応を取ってしまいがちだが、それだけではないもっと自分と同じような仕事に対する感情や捉え方をしている姿を知ると彼らの人間性というものを強く感じ親近感を抱いてしまう。理想でお腹は膨れないのだ。

その一方、作家という職業柄か自身の話をしているだけなのにそれぞれの文章にはそれぞれの個性が強く出ている。ハードボイルドな作風で知られる北方謙三はどこか砂ぼこりが舞うような雰囲気溢れているし、辻村深月は彼女自身が愛してやまないドラえもんを

彷彿とさせるようなどこか懐かしくてワクワクするような印象を持たせていた。こうして通常のアンソロジーよりも作家自身のパーソナルな部分が出ているため、よりわかりやすくその作家のことを知ることができるし興味が持てる。気になった人がどんなことを考え、どんなことを伝えたいのか。私たちは運が良いことにそれを彼らが書いた本で知ることができる。もしかしたら個性を文章で感じながら内容だけではなく雰囲気も気になった作家の本を新たに読むのも面白いかもしれない。